

はりの種 Re-NK 通信

活動報告(事例紹介)

Re-NKでは、沢山の方の〇〇したいを支援しています。今回は、その中の一部をご紹介しますと思います。

自費リハビリ開始2か月目のAさんです。右片麻痺で発症から1年、独居の方で、目標は「右手を日常生活の中で使えるようになる」事です。具体的には、歯磨き、書字、料理、着替え、箸操作、ゴミ捨てなど段階を踏んで細かい設定が必要です。

開始時、右手は痙縮が強く全く使用されていない状況でした。まずは、示指と母指で物を挟む動作を獲得し、補助的に使用する事から始めました。

開始1か月半で母指と示指の動きに僅かながら変化がみられ始めました。なるべく右手の使用頻度を日常生活でも上げてもらい改善に努めていきますが、何とか左手で食事摂取していた所を、自助具を使用して右手で摂取する事ができました。また、小銭入れのファスナーを右手で摘んで補助的に開閉が出来たり、新聞紙をめくる時に摘んで固定したりする事ができています。

まだ細かい練習が今後も必要ですが、日常生活の中で作業の効率化を図る事で、できる喜びを感じ、次の目標へ繋がり、「健康」と「幸福」に近づいていく事と思います。



開始1か月半



リハビリコラム

『プール活動レベル (PAL)』のご紹介

皆さんあまり聞き馴染みのない言葉かもしれませんが、作業療法士のツールで『プール活動レベル(PAL)』というものがあります。これは、認知症を持つ人の活動評価と、そこからケアに携わる人がどのように支援していけばよいかをチームで共有できるツールになります。

認知症を持つ人は、活動に関連した問題が生活のなかで出現する事で病気が発覚する事も少なくありません。その為、家族など周囲の人は活動能力に対する低下を感じ、できないという印象を抱きがちです。たとえば、料理の際にボヤを起こす、買い物に行って同じ物を度々買って来るなどがそれに当たると思います。この対応としてすぐに思いつくものは料理や買い物をしない・させない事です。この場合をよく考えてみると、生活上の問題は顕著に現れているが料理ができないわけではないし、買い物もできないわけではないです。しかし、周囲からの制限によりこれらの活動能力が活用されなくなる事で、周囲の人は「能力がない人」というレッテルを貼るようなことが出てきます。そして施設などに入居すると家事のような活動に触れる機会がほとんどない場所もあり、そういった活動能力が残存していることが周囲の人やケアスタッフにすら知られていない事が多いのが実情だと思えます。しかし、実際には認知症を持つ人は周囲の人の想像以上の活動能力を持っていることも少なくありません。

そんな時、このプール活動レベルを使用し、まず対象者がどのレベルの能力があるか4段階で評価し、その評価を下に、援助計画の作成・実施を行います。そうする事で、それぞれ活動のシーンで対象者にどのように関わるか、ケアスタッフ間で統一した関わりができ、活動能力を発揮する事ができます。特にこのツールはスタッフ間で言語化した情報を共有できるという所に魅力を感じます。職種間の信念対立を生まない為にも重要なツールだと思えます。

参考文献:「プール活動レベル～認知症をもつ人の活動評価から個別支援まで～」 医歯薬出版株式会社



まずはお気軽にご連絡ください

☎ 090-5087-3813

人と人、人とまち、人と作業を繋げる。

別府市リハビリリンク

🔍 検索

